日本資本主義と国民生活

上林 貞治郎 著

ミネルヴァ書房

〔著者略歴〕

上林貞治郎（かんばやしていじろう）

明治41年12月16日生まれ（堺市）。

堺市立第1幼稚園—堺市立熊野小学校—大阪市立天王寺商業学校—大阪商科大学高等商業部—大阪商科大学—同研究科を修了。

昭和8年より大阪商科大学副手—助手—講師—高等商業部教授—大阪商科大学助教授—大阪商科大学教授—大阪市立大学教授（商学部）をへて，昭和47年（1972年）に定年退職。その後，専修大学教授（経営学部）および同志社大学，龍谷大学，大阪産業大学などの非常勤講師。

関係民主団体　労働者教育協会，関西勤労者教育協会日本・ドイツ民主共和国友好協会，堺の文化をそだてる市民の会，その他。

現住所　堺市南三国丘町3丁5—2

主要著書（本書関連）　臨海工業地帯の分析（新日本出版社），日本産業の発展と中小企業問題（大阪・所書店），中小零細企業論（森山書店），日本産業論（ミネルヴァ書房），現代産業論（大阪・所書店），日本工業発達史論（学生書房），資本主義企業論（税務経理協会）など。

日本資本主義と国民生活

1978年5月10日　初版第1刷発行　　＜検印廃止＞
1979年3月15日　初版第2刷発行

定価2800円

著　者　上林貞治郎
発行者　杉田信夫
印刷者　本間昭之助

発行所　株式会社　ミネルヴァ書房
京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話京都(075)581-5191番(代表)
振替口座・京都8076番

©上林貞治郎，1978

中外日報社・酒本製本
Printed in Japan
3033-46013-8028

はしがき

一九四五年八月一五日、日本帝国主義の侵略戦争「一五年戦争」は、日本帝国主義者の敗北によって終結しました。その日は、人民にとっては解放記念日であり、日本人民は、平和と自由と民主主義の道を歩みはじめました。それから既に三〇余年が過ぎ、今年はその三三余年にあたります。しかし、戦後の日本人民が目指した平和と自由と民主主義の社会は、まだ実現してはいません。むしろ、その道は中途で妨げられて、反対に帝国主義的復活の道が現れてきました。今日、日本の人民・民主勢力は、平和と自由と民主主義の道を歩むためには、反動勢力・独占資本と闘い、その帝国主義的復活の道を断ち切らねばなりません。そのためには、かつての一五年間の帝国主義的侵略戦争の経過・内容を批判し、そのイデオロギー的残滓を清掃せねばなりません。本書は、この帝国主義戦争反対の立場——過去においても現在においても——から、そして帝国主義的復活反対の立場から、日本資本主義発達史の若干問題を考察しようとするものです。帝国主義戦争に真に反対するためには、その発生の基礎・根源を無くさねばなりませんが、そのためには、日清（一八九四年）—日露（一九〇四年）—第一次大戦（一九一四年）—日中戦争（一九三一年）—太平洋戦争（一九四一年）と、ほぼ一〇年ごとに侵略戦争をくりかえしてきた日本資本主義の構造・特質を科学的に分析し、侵略戦争発生の根源を断ち切らねばなりません。そのためには、戦争を無くし恒久平和を実現しうる主体的条件および社会体制の到来を展望せねばなりません。

本書の第一編「帝国主義戦争と国民の状態」は、一九三一年九月から一九四五年八月にいたる日本帝国主義の侵略戦争——日中戦争・太平洋戦争（第二次大戦）——の下における国民各階層の意識と抵抗について考察したものです。この一五年戦争の下における国民の意識・状態については、従来は、あまり積極的な注意・考察がなされずに、ただ、戦争遂行のための国民の意識の統制、生活の抑制、抑圧・弾圧として、つまり支配者・軍国主義

者によって「支配される者」として消極的に見られるに留まっていました。研究・言論・思想についても、軍国主義・侵略戦争によって抑圧された側面だけが強調されていました。国民各階層についても、戦争のために動員され犠牲にされ、戦時統制によって経済的に破滅させられ、生活物資の欠乏によって困窮化させられ、空襲によって無一物になった、というように受動的に述べられていました。しかし、このような叙述・説明は、「支配者」を歴史の主体としてみて、国民をただ「被支配者」「犠牲者」としてみる見方の要素を含んでおり、一面的な消極的な考察・評価に流れています。われわれは、むしろ、働く国民——労働者・農民・小商工業者・知識人・青年婦人など——を歴史の主体として位置づけ、それらの人々の労働や生活や意識を社会・歴史の中心において考えていかねばなりません。そこで、一五年間にわたる帝国主義的侵略戦争の下において、それらの人々は、いかに反応し、いかに考え、いかに語り、いかに行動したか、について考えてみたいと思います。

第二編「日本資本主義発達史と国民の状態」は、私が一九七五年に関西勤労者教育協会で「世界と日本の資本主義発達史」を講述（一〇回）したときの講述要項のうち、「日本資本主義発達史」に関する部分を主要内容として、それを改筆し更に補足的説明を加えてまとめたものです。この「日本資本主義発達史」の講述内容は、日本資本主義の発達史の説明とともに、それを科学的に理解するに必要なマルクス、エンゲルス、レーニンなどの諸理論の説明をも含んでいました。この講述は、約百名の勤労者諸君に、明治維新いらい一〇〇余年の日本資本主義発達史の大綱についての理解を与えるとともに、近い将来における社会主義への必然的移行の展望を与えることを課題としていました。それゆえに、日本資本主義発達史の講述といっても、それは、歴史的諸事実の具体的説明よりも、日本における資本主義の法則的発展と歴史的特徴についての説明を主眼としており、そのためにマルクス、エンゲルス、レーニンなどの基礎理論の説明を併せおこなったものです。本書においても、その趣旨を継承して（同様なテーマの講座や講義にも本書を利用するため）、日本資本主義発達史の説明とともに、それを理解するための基礎理論の説明をも含めたわけです。第二編を「日本資本主義発達史と国民の状態」としましたが、内容としては、日本資本主義発達史をいかに見ていくか、日本資本主義発達史をいかに考えていくか、という「見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

方・考え方」に重点をおいています――資本主義発達史の中に、社会主義への移行の諸条件の成熟過程をも見るために。

第三編「戦後の日本資本主義と国民の状態」は、戦後における日本資本主義の基本的変化を明らかにしつつ、戦後三〇年間にわたる対米従属的な国家独占資本主義の経過を、主要産業部門の発展と特徴によって考察し、最後に独占資本の状態と労働者階級の状態とを対照的に明らかにしています。この中で、日本資本主義における生産諸力の発展、労働生産性および生産の社会化の発展を示すとともに、その国家独占資本主義的利用の現実を批判的に示し、それに基づく労働者階級の窮乏化・貧困化の状況を明らかにするとともに、その労働・生活条件の根本的改善の方向を展望しています。

以上を通じて、私は、明治―大正―昭和を通ずる日本の資本主義百余年の発達史は、同時に、資本主義から社会主義に転化するための客観的および主体的な諸条件の成立・発展・成熟過程であることを解明しようとしました。人間の歴史を創る主体は働く人民であるという真理を、日本資本主義発達史の考察の中でも明らかにしようとしました。一部の人々は、日本資本主義発達史の主体を支配者・支配階級（とくに資本家）においています。また一部の人々は、一般的には歴史の主体は人民であるといいながらも、日本資本主義発達史の叙述では、支配者・支配階級の支配・搾取・収奪・政策を前面にとりだし、人民については単に被支配・被搾取・被収奪の側面だけをみており、したがって支配者・反動勢力は積極的活動者として、人民・民主勢力は消極的忍従者として、描き出されています。また一部の人々では、社会は支配者・支配階級の意図・政策を基軸として回転しており、人民は支配階級の悪さを立証する人間的材料としてのみ叙述されています。このような見方・考え方は、資本主義の永続論でなければ、支配階級の万能論か、人民の無力論か、敗北主義思想か、せいぜい客観主義的立場かに帰着せざるをえません。支配者・支配階級の批判に全力をあげても、支配者を打倒する主体である労働者階級・働く人民の発展・成熟を見なければ、科学的な正しい展望は生れてきません。

本書の叙述において、私は、経済学、歴史学、文学、調査・手記・評論など、いろいろな文献から多くのもの

を吸収しました。その主なものは、文中に記載しておきましたが、個々の諸事実を知った諸文献・資料は多数であるため、一々記してないこともあります。ここで、これらの諸文献・資料にたいして厚く感謝の意を表しておきたいと思います。私は、日本の歴史・社会＝日本資本主義社会を真に担っている主体、その中で労働によって生産・経済や文化・思想を創造している人々、この日本の歴史・社会を推し進めている人々は、働く人民すなわち労働者、農漁民、小商工業者、知識人、青年・婦人、その他一般の民主的人々であるという見方・考え方に基づいて、日本資本主義発達史――明治維新以来一〇〇余年――の中の若干問題を考察したにすぎません。本書は、一般史・通史ではなく、その中の若干問題をとりだして考察したものです。私としては、前記のような見方・考え方からみて重要と思われるもの、今まで一般に充分に述べられていないと思われるもの、についての若干問題を述べたわけです。明治維新以後一〇〇余年間において、数億という日本の人民が生れ、働き、去って行きました。太平洋戦争の最後の年に亡くなった人々も、昨年には三三回忌を終わりました。今日のわれわれは、これら数億の働いてきた日本人民の労働と生活と闘争の歴史的社会的遺産に基づいて、労働し生活し活動しています。それらの人々の歴史恩・社会恩に報いるためにも、一日も早く平和と自由と民主主義の社会を日本に実現したいと念願しています。

一九七八年三月・春分の日

上林貞治郎

目　次

はしがき

第一編　帝国主義戦争と国民の状態

第一章　日清・日露戦争と国民の意識……二
一　日清・日露戦争と反戦詩歌……二
二　日露戦争における反戦思想……七

第二章　日中・太平洋戦争と国民の意識・状態……一八
一　農民の意識・状態……一八
二　青少年の意識・状態……二六

第三章　日中・太平洋戦争と国民の意識・抵抗（Ⅰ）……三五
一　帝国主義戦争下における国民の意識と抵抗……三五
二　帝国主義戦争下におけるマルクス主義の研究と啓蒙
——(一)一般的考察……四四

三　帝国主義戦争下におけるマルクス主義の研究と啓蒙
——(二)若干の具体的考察……五一

第四章　日中・太平洋戦争と国民の意識・抵抗（Ⅱ）……八二
一　非戦・厭戦・反戦の意識……八二
二　宗教的意識に基づく非戦・反戦の立場……九七
三　国民各階層の抵抗意識の現れ……一〇三
四　科学的社会主義に基づく組織的反戦闘争……一〇九

第二編　日本資本主義発達史と国民の状態

第五章　日本資本主義と労働者階級……一二〇
一　資本主義の成立・発展・消滅の運動法則……一二〇
二　労働者階級の状態……一三三

第六章　資本主義生産・産業革命・資本主義の発展……一四七
一　明治維新——資本主義生産の成立・発展……一四七
二　機械制大工業の発展——産業革命の進行……一六一
三　産業動力の発展——水力・汽力・電力……一七八

第七章　資本主義の独占段階および全般的危機……一九五

一　日本資本主義の独占資本主義（帝国主義）への移行……一九五
二　日本における資本主義の全般的危機……二一五

第八章　日中・太平洋戦争下の日本資本主義……二四八
一　帝国主義戦争下における軍事・政治・経済の進行状況……二四八
二　帝国主義戦争下における国民生活の窮乏化状況……二六七
三　帝国主義戦争下における産業構成の高度化と戦時国家独占資本主義……二八三

第三編　戦後の日本資本主義と国民の状態

第九章　戦後における日本資本主義の変化……二九八
一　第二次大戦後における世界史的変化……二九八
二　第二次大戦前における日本資本主義の基本的特徴……三〇三
三　第二次大戦後（敗戦後）における日本資本主義の主要変化……三〇七

第一〇章　主要産業部門の発展と特徴……三一六

第一一章　独占資本の復活・発展と労働者階級の状態……三三七
一　独占資本の復活・発展……三三七
二　労働者階級の状態……三四五
三　むすび——国民生活の向上のために……三五六

第一編　帝国主義戦争と国民の状態

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　日清・日露戦争と国民の意識

一　日清・日露戦争と反戦詩歌

支配者のための武力闘争・戦争、支配階級の富と力を強めるための武力闘争・戦争は、古代の奴隷制社会から行なわれてきた。日本でも、古代の奴隷制社会では、奴隷主であった支配者たちの争いは、たえず武力闘争・戦争を引き起していた。中世の封建主義社会は、源平時代から織田・豊臣時代にいたるまで、封建領主＝大名たちの間の武力闘争・戦争を伴っていた。漸く徳川時代になってから二百数十年の間は、部分的な武力闘争はあったが、大きな内乱なしで過ぎた。しかし徳川幕藩制から明治時代に移る明治維新は、大きな内乱を経過した。これらの日本の国内の武力闘争・戦争は、いずれも、その時々の支配者たちの争いのための戦いであり、一群の支配者たちの富と権力のためであり、一般の働く民衆はその犠牲とされてきた。封建時代になって定着された身分制のうち、農民・手工業者・商人などの人々は、その戦いの犠牲となってきた（上田秋成『雨月物語』は、そのことを物語っている）。

このような武力闘争・戦争の歴史的経過と、一般民衆の犠牲という歴史的経験とによって、明治時代の民衆は、支配者のための武力闘争・戦争による民衆の被害・犠牲を、直接あるいは間接に知っていた。多くの口伝えや物語りは、内乱・戦争が民衆に与える悲惨さを人々の心の中に刻みこんでいた。明治維新以後も、維新当時の大内

乱と西南戦争にいたるまでの数次の小内乱とによって、人々は、支配者のための戦争の非情さを知っていた。日清戦争・日露戦争についても、そのことは、同じである。ただ、日清戦争・日露戦争は、幕末から明治初期にかけての内乱と異って、外国にたいする、国外への侵略戦争であるから、侵略戦争を遂行する支配者たちは、民衆の間に「排外主義」「愛国主義」「民族主義」を鼓吹することによって、人々をこの侵略戦争の中に巻きこむ方法をとった。また、そのために、支配機構や弾圧法規を整備し、軍国主義教育を促進したのである。

それにもかかわらず、多くの民衆は、国外への侵略戦争を好むものではなく、むしろ他国の人々を殺傷しに行くことからの逃避を求めていた。帝国主義戦争は、他国・他民族に侵略戦争をおこなって殺傷し、また、そのために自国民を肉弾として犠牲に供するものである。それは、自国民にたいしては反国民的であり、他国民にたいしては反人類的である。帝国主義戦争・侵略戦争のこの性質と内容は、それを素直に見たり考える人々にとっては、明々白々のことである。それゆえに、人々の心をうたう詩人・歌人は、侵略戦争に対する人々の姿・心情を、ありのままに詩歌にうたっている。その若干を次にとりあげて考えてみよう。

（1）「農夫」（島崎藤村『夏草』）は、その家族・両親と別れ、その田畑をうちすてて、他国の土地での戦争に出て行くのを厭うている一人の農夫とその父・母との言葉を、次のように歌っている。当時、兵士の大部分は農民出身であったので、この内容は、多くの兵士やその家族の心にアピールしたことであろう——

まず父は、出征を厭う息子に、「げに汝はしも吾家の／高きほまれを捨つるまで／世のことわりもわかぬまで／いくさを恐る心かや」と、いいきかせている。しかし、農夫は、「懼れやはするよしや今／心を奪ういかづちの／ふるふがごとく大砲の／まなこの前にとゞろくも／われは静かに鍬とりて／としつき慣れし利根川の／岸辺にいでて小田うたむ／または流るゝ弾丸飛びて／耳のほとりをかすむとも／たなれの鋤を肩にして／ゆうべの歌をうたひつゝ／いと冷やかに桑の樹の／葉蔭を履みて帰るべし」。そして、「剣をとるも畠うつも深き差別はあらざらむ」と、答えている。それに対して母は、「さわれかくまで言いはりて／軍の旅を厭いなば／その暁やいかならむ／思うも苦し罪人と／名にも呼ばれてあさゆうべ／暗き牢獄の窓により／星の光を見るの外／身に添う影も

あらざらん／見よ花深き川岸に／むつまじかりしまどいさえ／させる嵐のさわぎなば／家のむつびもたのしみも／一夜のうちに破れなん」と、歎いている。

この歌を収めた藤村詩集『夏草』は、明治三一年（一八九八年）に出ているから、この歌の内容は、日清戦争の時における農民兵士とその家族との心境を反映している。日清戦争（一八九四―五年）の時期には、日本資本主義は、未だ明治維新より二五年ばかりであり、資本主義を確立させる産業革命の時期にあったのだが、明治初期からの軍国主義的傾向（とくに絶対主義的天皇制の）と、朝鮮にたいする従来からの侵略主義的意欲（征韓論などに代表されるような）と、急速に資本蓄積を強行して国外進出に目を向けていた大資本と、すでに独占段階に入っていた各国大資本の国外進出との競争などに促進されて、資本主義確立過程の日本資本主義が、早期の侵略戦争に乗り出したのであった。しかし、当時において国民の多数を構成していた農民の心境は、右の「農夫」の歌のようであった。

〔注〕横山源之助『日本の下層社会』（明治三二年発行）の第五編「小作人生活事情」は、「詩人と称する者あり、田舎生活を自然に近しと做し、農民を以て人の中に於て最も苦少なしと謳うて羨むを見たることあり、自然に近きものなりや否やは余は之を知らずと雖も、農民特に小作人ほど多大の忍苦を投じて得る所の報酬尠く、其の生活の憐むべきは世に多からざるべし。」と述べている。農民は明治維新によっても解放されず、徳川封建制時代と同じような高率現物地代によって、半封建的搾取関係の下に苦しんでいた。その農民がどうして簡単に出征できようか。思いは、その妻子、両親、田畑の手入れ、そしてわが命にいたるであろう。

（2）「乱調激韵」（中里介山）――中里介山は、『平民新聞』（幸徳秋水・堺枯川たちの）に執筆していたが、はげしい口調で日露戦争を批判している。

まず「鍬投て、我今日出立つ故山の圃／籬に凭りて我を送る老たる母／白髪愁長くして老眼涙あふる／慇懃、袖を引く、我がうない子／無心、彼は知ず、父が死出の旅」と、死出の旅に出る人々の状況を歌い、さらに、「我を送る郷関の人／願ば、暫し其『万歳』の声を止よ／静けき山、清き河／其の異様なる叫びに汚れん／万歳の名に依て、死出の人を送る」と歎いている。そして船出した海上において、兵士の心は、「淼淼煙波三千里／東、郷関を顧みて我が腸断つ／西、前途を望めば夏雲累々／泣かんか、笑わんか、叫ばんか／一夜、舷を叩いて

月に対す、あー我、怯なりき／懐は横奥高吟の英雄に飛ばず／家郷を憶うて涙雨の如し」と、苦しい胸中を歌っている。そして戦場の状況については、「落日斜なる荒原の夕／満目に横う伏屍を見よ、／夕陽を受けて色暗澹／夏草の闇を縫うて流るる／其の腥き人の子の血を見よ／敵、味方、彼も人なり、我も人也／人、人を殺さしむるの権威ありや／人、人を殺すべきの義務ありや。」と、侵略戦争の残酷さを憤っている。

この詩は、後年に『大菩薩峠』で有名な中里介山のものであるが（『日本反戦詩集』秋山・伊藤・岡本編より）、これも、田畑や家族から離れて出征する農夫を悲しみ、「敵、味方、彼も人なり、我も人なり」といって、反戦の声を歌っている。

（3）「君死にたまふことなかれ」（旅順の攻囲軍にある弟宗七を歎きて――与謝野晶子）の歌（一九〇四年九月、雑誌『明星』に発表）は、すでに有名である。その内容は、町の商家の子弟しかも新婚の青年の出征を悲しむ肉親の心情を歌っている。

それは、「ああ、弟よ、君を泣く／君死にたまふことなかれ……／親は刃をにぎらせて／人を殺せと教えしや／人を殺して死ねよとて／廿四までを育てしや」ということから始まり、「君死にたまうことなかれ／旅順の城はほろぶとも／ほろびずとても、何事ぞ／君は知らじな、あきびとの／家のおきてになかりけり。」とつづけ、さらに、「君死にたまうことなかれ／すめらみことは、戦ひに／おほみずからは出でまさね」と支配者・命令者を批判し、そして「暖簾のかげに伏して泣く／あえかに若き新妻を／君忘るるや、思へるや／十月も添はで別れたる／少女ごころを思ひみよ／この世ひとりの君ならで／ああまた誰を頼むべき／君死にたまうことなかれ。」と結んでいる。

私は、この与謝野晶子の実家の近くに生れ育ち、その家の状況をも知っているので、この歌は現実感をもって迫ってくる。その家は、「海こひし潮の遠鳴りかぞえつつ少女となりし父母の家」という晶子の歌で判るように、海に近いところにあった。この歌は商家の子弟の出征を歎くもので、「暖簾のかげに伏して泣く」というように、青年夫婦の情をも含んでいる。

（4）「母ちゃんごらんよ」（作者不詳の流行歌）は、日露戦争で戦死した兵士の妻と幼い子供とのあわれさを歌っている。とくに未だ幼い子供が、父の死の意味を知らずに、帰って来るのを待っている状況は、人の心を打つものがある――

それは、まず「母ちゃんごらんよ向こうから／サーベルさげて帽子きて／父ちゃんによく似たおじさんが／たくさんたくさん歩いてる／もしやぼくの父ちゃんが／帰って来たのじゃあるまいか。」と、父を失った幼い子供の声を歌い、これにたいして母は、「ゆうべもいうてきかせたに／はやお忘れかお父さまは／こんどの旅順のたたかいに／名誉の戦死をあそばして／あの仏壇のお位牌よ／あれが坊やの父さまよ。」といいきかせているが、子供はなおも、「父ちゃんえらい、死ぬものか／あの仏壇の父ちゃんは／何にものをいわないし／坊やを抱いてもくれないし／ほんとのぼくの父ちゃんを、連れて帰ってちょうだいな。」と訴えている。

〔注〕高橋磌一『流行歌でつづる日本現代史』より。

以上に紹介した詩歌は、それぞれ反戦などのニュアンスを含めて、帝国主義的侵略戦争にたいする多くの国民の自然の抵抗感情を示している。それらは、帝国主義戦争・侵略戦争の性質・原因についての社会科学的な自覚がないとしても、人間性、人道主義、博愛主義、自然主義など、人間の精神の自然の発露として、自分の生命を愛し、家族の幸福を願い、夫・父の死を悲しみ、そのために、残酷・無情な殺人戦争にたいして、意識的または無意識的に、積極的または消極的に、抵抗している心中を表しているといえよう。人間がこの世に生れてくるのは、また生きとし生きるものの目的は、その人生を心身ともに実り多いものとするためである。それなのに、お互い殺し合う戦争を好む人間がどこにあろうか、――戦争によって自己の富と力を強めようと考える一部の支配者たちを除いては。

二　日露戦争における反戦思想

日露戦争（一九〇四・五年）は、日本資本主義とロシア資本主義との双方の側において帝国主義的侵略戦争であり、両国支配階級の利権をめぐる戦争であった。日本資本主義は、明治一〇年代から三〇年代にわたって産業革命を遂行し、三〇年代末期より急速に独占資本主義＝帝国主義の段階に移行しつつあった。したがって、その資本主義的発展とそれに基づく諸矛盾や階級的対立の発展、および労働者、働く人々、進歩的知識人などの政治的成長によって、日露戦争＝帝国主義戦争にたいしては、意識的な反戦思想が形成されていた。

次にその主なものをみよう。

Ⅰ　キリスト教の平和思想に基づく戦争反対

一人の人間の生命は、この世で一回きりである。この世に生をうけてきた人間の命を、他の人は誰もこれを奪うことはできない。人間の生命の尊厳さに思いをはせると、人間はお互に殺し合うことは許されない。日露戦争の当時、宗教者の立場から戦争に最も明確に反対したのは、キリスト教徒・内村鑑三たちであった。

その反戦の主張を次にみてみよう——

日露戦争の前年に『萬朝報』（一九〇三年六月三〇日）で、内村鑑三は、次のように書いている。——「余は日露非開戦論者である許りでない。戦争絶対反対論者である。戦争は人を殺すことである。爾うして人を殺すことは大罪悪である。……戦争の利益は強盗の利益である。……戦争廃止論は、今や文明国の識者の与論となりつつある。……世の正義と人道と国家を愛する者よ、来て大胆に此主義に賛成せよ。」と。

また、日露開戦の後には、次のように主張している（『内村鑑三所感集』鈴木編・岩波文庫。—『聖書の研究』誌上の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com